

著者プロフィール

田中俊光（たなか・としみつ） 1979年東京都生まれ。2002年、日本大学生物資源科学部卒業。大手住宅メーカーのグループ会社で外構造園専門部門に勤務し、転職後は造園・外構に加え住宅のプランニングも手掛ける。2013年3月に独立し株式会社ナインスケッチを設立。雑木の庭をはじめ、エクステリア・外構のプランニング・施工管理に携わる。主な受賞歴：2011年、「ユニゾン フォトコンテスト2011」ファサードガーデン部門ゴールド賞受賞、2014年、「浜名湖花博庭園コンテスト」浜松市長賞受賞、2014年「第2回ブロックガレージデザインコンペ」入賞、2017年、三協アルミ「エクステリアデザインコンテスト2017」ファサード部門 ゴールド賞受賞。資格：一級造園施工管理技士、一級土木施工管理技士、エクステリアプランナー1級、二級建築士。



写真1 天竜古民家水脈改善

溝を掘り、炭を敷き、有孔管を設置、その周囲に竹、枝、葉などの有機物を空気を通して組みながら入れ、それらが泥濾しの役割にもなる。

前回までに環境をどう読み解くか、そして現状の山の環境や昔と今の住まい環境の比較などの話をさせて頂きましたが、今回は、環境悪化しているところを実際どう改善していくかの話をさせて頂きます。

山で表層が露出されたり、土砂が崩れたり、倒木したり、敷化しているのは、その周囲にコンクリートなどで地中の空気と水が停滞していることが原因の一つであるという話をしてきました。ですから、改善の仕方は健全な山のように空気と水がしっかりと循環する土中環境を作ってあげればいいのです。山では、尾根と谷がある関係で降った雨は土中に浸

み込み谷へと抜けていきます。水は高いところから低いところに動きます。その過程では、水だけでなく空気もしっかりと通っているという話はしてきました。その関係に倣って、改善現場では、素掘りの溝や点で穴を掘るなどして地形に落差をつけ、表面だけでなく立体的に空気と水が循環できるように水脈を作るようにします。

写真1は、天竜の古民家のある里山の環境改善です。古民家の周囲に溝を掘りますが、自然の川は蛇行や滝壺のように深みを作りながら流速を調整するように、溝だけでなく所々に点で深みを作るようにしていきます。次に溝底に炭を敷きます。炭は、微生物などの住処になることはよく知られていますが、多孔質なので団粒構造の土のように空気を通る材料でもあります。次に有孔管を設置し、その周囲に竹や枝や葉っぱなど有機物を入れていきます。一般的な土木の暗渠の排水ですと有孔管の周囲に単粒砕石と透水シートで埋設していきませんが、それだといずれ泥詰まりし、機能しなくなってしまう。余計、そこで空気が停滞しだし酸欠状態になり、土は有機ガスを発生させグライ土に変わって

きてしまいます。

大地の再生の手法では、単粒砕石と透水シートは使うことなく有機物で埋設していきます。ただ、それも単にそれらを入れればいいのではなく空気を通るように枝や竹などを絡ませていきます。人が入れると、きれいに整頓して入れがちになりますが、そうではなく、自然の川が枝を運ぶように絡めながら入れていきます。有機物は、微生物や菌糸が絡みながら空気の通り道を確保し、いずれ土に戻っていきます。その頃には樹木の根もそこに侵入し根が媒体となり空気の循環を確保してくれます。

点で穴を掘り通気改善をした時に、隣の樹木を掘り返すことができました（写真2〜6）。ここでは、有孔管の代わりに竹筒を使っておりますが、竹筒のある方に樹木の主根が伸びているのがわかると思います。根の先にはしっかりと細根が出て菌糸も付いているのが目に見えます。それに対して、反対側は根の伸びが弱いのがわかります。

このように樹木自身も空気を求めて根を伸ばすのがわかると思えます。有機物を埋設した水脈改善のところが空気の通り道となり、そこをきっかけに、樹木の根が侵入し、いずれは地中で樹木の根や菌糸がネットワークを組み毛細血管のように広がり敷地全体の水脈を改善していくことになってくると思います。



大地の再生

連載

造園家 田中俊光

(株)ナインスケッチ代表)

文明が発達することで住みやすく感じるのは 世代を超えた時間で見れば一瞬かもしれない



写真4 太い主根も空気を求めて伸びている



写真3 竹筒の周りに空気を求めて根が侵入している



写真2 竹筒で点で深い穴を掘り、通気改善



写真6 先端まで細根がしっかりと出ている



写真5 主根と逆側は根の張りが弱い

古民家周囲の土中の空気が通り出せば、そこに常に大気圧が掛かっている。土中の空気を埋めようと地上の空気も動き出すのです。古民家は木材や土壁などを使っていることが多く、呼吸させた材料です。昔は室内に囲炉裏を置いて上昇気流を産んで空気の対流を作っていたくらいです。要は土中の空気が動くこ

とで地上の空気も動き古民家までもが息を吹き返し状態がよくなってきます。また、地上には心地よい風が吹き出し人にとっても過ごしやすい空間に変化してきます。

自然を無視し樹木を排除するのではなく、自然のメカニズムに沿って動植物たちの力を借り水脈を改善していくことで心地よい住まいや空間が作れてくると思います。

しかし、今日は、宅地の造成やメガソーラーなどを作るために樹木を伐採し大地を削り、大地の血管である水脈を壊しています。こんなことを続けていたら、いつかは、人が住めない環境を作り出すのではないかと考えてしまいます。文明が発達することで住みやすく感じるのは世代を超えた時間で見れば一瞬かもしれない。現代を、先人の人たちが何百年も掛けて大切に自然に寄り添って暮らしてきた財産を戦後の高度成長期から今日まで食いつぶしてきました。このまま更に文明が発達し自然を破壊したり、力で抑えつけようとするので今まで経験したことのない災害などが起こらなければいいですが・・・。

我々造園、外構エクステリアの仕事は、ものを組み合わせてデザインするだけでなく、目に見えない空気をデザインすることが最も大切なかもしれません。

連載の目的

執筆者の静岡県浜松市の造園家・田中俊光さんは、長い間、造園・エクステリアと建築、まちづくりの融合を考えた「空間づくり」を実践してきた方です。田中さんの作る「雑木の庭」は、単に鑑賞する場所ではありません。その場にいると、不思議と「人を快適にさせる」空間でもあります。

しかし、中には、どうしても植栽が枯れてしまう場所もあります。どうしてなのか？一田中さんは現状に満足しませんでした。その中で「大地の再生」という考え方に出会いました。そして探求を続けていくうちに、日本の住宅のほとんどが、雑木が枯れてしまう酸欠の土壌になっているのでは？という疑問を抱くようになりました。

果たして、現在の住宅業界、そして造園・エクステリア業界に、そうしたメッセージが受け入れられるのか。少しでも快適空間の創造に貢献できる業界にしていければという思いで、新しく連載を引き受けて頂きました。ぜひとも、この連載を通じて、これからの日本の国土のあり方について、造園・エクステリアの観点から貢献出来ることを一緒に考えて頂ければ嬉しいです。